

## 気になる指標

## 「景気動向指数」その1

## 景気の動きを見るための総合的な指標

景気の動向を測る指標には、国内総生産（GDP）や日銀短観などのほかに、内閣府から毎月発表される景気動向指数がある。

景気動向指数は、生産や雇用など、さまざまな経済指標の中から景気に敏感に反応する30種の指標の動きを統合することにより、総合的な景気の現状把握や将来予測を行うものである。

景気動向指数は、景気を先取りして変化する「先行指数」（新規求人数など12本）、景気と並行して動く「一致指数」（百貨店売上額など11本）、景気に遅れて変化する「遅行指数」（在庫指数など7本）の3種類がある。

## DIとCIの概要と利用の仕方

景気動向指数は、DI（Diffusion Index）とCI（Composite Index）の2つからなる。

DIは、変化の方向を合成することにより、景気局面の判断などに用いられる。具体的には、先行、一致、遅行の各系列で採用している各々の指標を3ヵ月前の数値と比較し、プラスとなった指標数の割合を示す。景気が良いか悪いかという景気判断の目安は50%ラインであり、50%を超えていれば、景気は上向きになっているととらえる。一致指数が3ヵ月以上連続して50%を上回っているときは景気拡張局面、逆に下回っているときは後退局面と判断する。8月15日に発表された03年6月の景気動向指数（確定値）のDIは、先行指数、一致指数ともに景気判断

の分かれ目となる50%を2ヵ月連続で上回った。

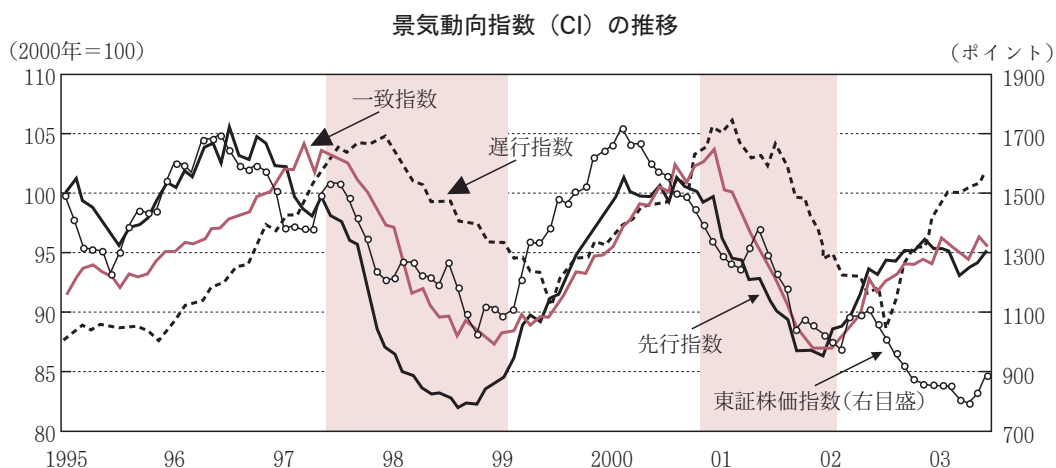
一方CIは、景気に敏感な指標の量的な動き（変化率）を合成した指標であり、景気変動の大きさやテンポ（量感）を把握するのに用いられる。一致指数が上昇している時が景気の拡張局面、低下している時が後退局面であり、一致指数の山・谷の近くに景気の山・谷が存在すると考えられている。ただしCIは、景気の局面を山・谷の2局面に分割するものではなく、変化の大きさが景気の拡張または後退のテンポを表しているのとらえる方がよいだろう。

## バブル後3回目の山へ

景気動向指数のCIと先行系列のひとつである東証株価指数を比べてみると、下図に示すとおり、東証株価指数は先行指数と同じような動きをしているものの、景気の拡張・後退のテンポがやや異なることが分かる。

景気の山がどれぐらいの大きさになるかを予測することは困難だが、現在は02年後半から03年初めにかけて小幅な短期調整を経て、バブル崩壊後4回目の山に向かって進んでいると考えられる。戦後の景気拡張期間（谷から山まで）は平均33ヵ月。前述の小幅な短期調整をどのように考えるかの問題はあるが、今回も同じだけの期間が続くとすれば、04年度後半に景気の山を迎える可能性も想定される。=次号に続く

（木村 俊文）



内閣府「景気動向指数」、東証「東証統計月報」より農中総研作成  
 (注)シャドウ部分は景気後退期を示す。